

ない。ところが未開の領域では、自由な夢と想像が許される。

化学を少し学んだ人なら誰でも承知の光学的活性物質がある。遺伝子又は、これから二次的、あるいは高次的に生じる物質が旋光性を有しておるとするならばこれに光が当つて、光の振動面が回転されると同時に、何らかの圧力が物質に与えられるのではないか。この微小な力が、左右性決定の原動力になると考えるのはどうであろう。

もつともこれは夢の又夢であるかもしれない。そしてあとに残された探究の途は試行錯誤という全くの幼見的行動あるのみである。しかし夢は楽しい。生きがいを感じるのである。

俳人千代女の心に詩情を湧かせた、あのアサガオに無上の愛着と魅力を感じる。こんなことに結びつけて、千代女の観察眼の良さを賞賛したりするのは、詩情を無視した思い過しであろうか。

## ヤマメの産卵数と食性の調査

種 口 繁 一

ヤマメ *Oncorhynchus milktschitsch* は美しい斑点のある魚で溪流の夏も水温の低いところを好むものである。丹波地方では水上郡神楽村(加古川上流)と多紀郡後川村(武庫川上流)のみに知られている。昭和27年8月、多紀郡後川村(神戸市水道千刈水源池の上流15 km.)でヤマメ(大島博士のアマゴ型)を採集する機会を得たので、その産卵数と食性を調査することが出来た。幸い産卵期の直前であつたので抱卵数を数えることが出来た。

(個体) (体長) (卵数) (右卵巢) (左卵巢)

a	28cm	158	102	56
b	26	225	90	135
c	22	210	110	100

(個体) (体長) (卵数) (右卵巢) (左卵巢)

d	201cm	91	100	91
e	15	143	60	83
f	14	116	56	60
平均		191		

今迄記録された産卵数に比較して非常に少い事は注意すべきことである。

次に食性は胃を開いて見た。採集後直ちに胃を採り出し両端を糸で結んでホルマリンに漬けて持帰つたが多くの個体は空になつていた。数個体について次のものを見た。ノラハナアブの幼虫、クロツチバチ、ハラビロヘリカメムシ、ヒメバチ、アメイロバチ、クロヤマアリ、ヨコバイ等が見られた。

## 珍しい淡水クラゲ

大正10年三重県津市の古井戸から発見されその後、古井戸は焼失して了つたと思われた。日本特産の淡水クラゲが伊丹市緑ヶ丘、伊丹池に於て大阪学芸大学木村桂三君他によつて発見された。

同池の水深5 m、水温20°Cで水はよく澄んでおり、その中に直径1.5~2 cm位のクラゲが点々と泳いでいるのを発見。このクラゲは半球形より扁平に近く無色、放射管は4個あつて、触手は4の倍数で中空、口唇も4個ある。(毎日新聞 Oct. 23. 1952)

このクラゲは兵庫県に關係の深いもので、皆て姫路

師範の博物科教諭であつた西本俊雄先生が三重の津に在職中、大正10年に発見されたもので学名を *Limnocodium iseanum* と云う、傘は半円形より低く扁平其の後火災のために絶滅したと思われた。それが又本県で発見された。西本氏は昭和13年から北海道の帯広中学校長に転じ其の後道内の校長を歴任、終戦後、郷里揖保郡太田村で余生を送つておられる。

同先生と酒席で漕うと、備前クラゲではないが酒の肴(?)に何時も生物屋(失礼)らしくなつて手柄話に花が咲きなつかしい。(室井紳)